

ク」は市内に六つある生産組織が昨年統一した「にたてもち」の商品名。うるち米を2度蒸し、丸く棒状に練り、成型している。食感が餅に



「村上まんまスティック」の普及と消費拡大を目的に開かれた料理講習会

国認定受ける

長岡市 商品開発も始動

新潟県長岡市の農業生産法人(株)たべたがりは、5月発も始動した。今後の施設末に農水省の6次産業化法に基づき事業計画認定を受け、準備を進めている。昨年借りた畑に新たに耕作放棄地も加え、野菜生産に着



野菜加工で新商品の開発に取り組むメンバー

有農地はなく、畑50畝を借り、野菜の生産と加工に取り組む。コンニャク芋、ダイコン、ニンジンなど、加工できる野菜を作付け、地元農家や農業普及指導センターの指導も仰いでいる。

同法人の小林薫代表は「新たな農業ビジネスの可能性に、地域資源を活用したい」と意気込む。

商品開発では、企業が撤退し、空いていた700平方メートルの工場を取得。調理場

新潟 準備 法人 6次産業化へ

晩生品種のエダマメ「肴豆(さかなまめ)」の取り放題イベントを行った。写真。今年で2年目となり、期間中に4回実施。昨年を超える350人の

参加があり、世代を超えた来場者でにぎわった。同イベントでは、100円で1斤のひもを購入。25斤の畑でエダマメ

を、同イベントに無料招待した。「なじら〜」では21、22の両日、関原店と東店で秋祭りを行い、地域住民と収穫の秋を祝う。

園児が稲刈り 初めて体験

新潟市南区 西白根保育園 園児らが、中央青壮

区の西白根の稲刈り体験。園児らが、中央青壮

と加工備品をそろえ、研究も始めている。すでに、こんにゃくと漬物を1日当たり各100割(1割200割)ずつ製造する他、ニンジンやニンニクの乾燥野菜も作り、同市内のスーパリーや飲食店向けに販売している。

今後、認定事業を活用して製造ラインを整備し、おでんの具材を中心に、商品開発と販路開拓に取り組む考えだ。驚頭政展工場長は「製造体制が整うことで、責任とやりがいを感じる」と話す。障害者を含めた地元雇用や、遊休農地を活用した取り組みへ、周囲からも期待が寄せられている。

資金調達には、JAバンクが創設した「アグリシードファンド」も活用している。同施設の責任者、佐藤ひで子さん(61)は「米の直販ルートで、農産加工品についても需要がある。6次産業化で、年間働ける場

り組む事業。稲刈り園児が協

「製造体制が整うことで、責任とやりがいを感じる」と話す。障害者を含めた地元雇用や、遊休農地を活用した取り組みへ、周囲からも期待が寄せられている。

米の加工と合わせ、漬物や特産品を製造・販売し、従業員の周年雇用にもつなげる。直売所では仲間の空きハウスも利用し、冬期間の野菜作りにも挑戦する。加工品と直売所での売り上げで、「売り上げ1億円」(ひで子さん)を目標に掲げる。

初日に直売所を訪れた農家の女性は「地元で、旬の食材が手に入る直売所があると助かる。農家も消費者なので利用したい」と話す。

た」と話。収穫し、作業で脱穀感謝

加工と直売の 施設オープン

村上市 新潟ゆうき

新潟県村上市の農業法人、新潟ゆうき(株)は7日、農産物直売所と加工所が入った施設をオープンした。



直売所と加工所をオープンした佐藤さん夫妻

初日に直売所を訪れた農家の女性は「地元で、旬の食材が手に入る直売所があると助かる。農家も消費者なので利用したい」と話す。

た」と話。収穫し、作業で脱穀感謝